

3) 事業3 ふれあい体験活動

開催日時 平成1311月2日 金曜日 15時40分～18時

会場 教育学部302号室

助言者 三大小学校校長 長尾明義先生

三大小学校教務主任 佐藤昭先生

弘前市教育委員会指導主事 小田切敦先生

青森県総合学校教育センター指導主事 千田雅美先生

司会者 加藤麻由子

平岡史

司会：これから、ふれあい体験活動事業3の分科会をはじめたいと思います。進行させていただく加藤です、平岡です。よろしくお願いします。この分科会では、各活動グループごとに、今回の活動報告をしてもらい、3グループ発表後、活動内についての質問や、今回の反省点についての学生の意見、考えや、先生方のアドバイス、ご意見などの時間を設けながら、進めていきたいと思います。皆さん、積極的に発言して下さい。では、今回参加していただく先生方の紹介をします。

三大小学校校長の長尾明義先生

三大小学校教務主任の佐藤昭先生

弘前市教育委員会指導主事 小田切敦先生

青森県総合学校教育センター指導主事 千田雅美先生

よろしくお願いします。

司会：それでは、早速始めていきたいと思います。発言の際、学生は始めに自分の名前を言ってから発言するようにしましょう。では、第一グループさん、まず活動報告をお願いします。

千葉：1班では、屋外に5つのゲームを設けて自由に遊んでもらう形式でした。活動内容は、魚釣り、動物倒し、輪投げ、びゅんびゅんごま、お絵かきコーナーです。

魚釣りは、裏に点数を書いた紙の魚にクリップをつけ、磁石をつけた釣り竿で釣り、点数を競うというものです。1人1分間を持ち時間とし、釣り大会を、時間を決めて行いました。釣り大会以外の時間は自由としました。動物倒しは、段ボール紙に動物の絵を書き裏側には点数を書き、玉入れの玉を学校から借りて動物に当て、合計の点数を競いました。1人5球としました。輪投げは、新聞紙で輪を作り、学校の椅子を借りて椅子の脚を棒代わりにしました。距離によって点数を変え、合計点を競いました。

びゅんびゅんごまは、厚紙をいろいろな形にあらかじめきっておき、真中に風糸を通して作りました。厚紙には自由に絵を描いてもらい、形も変えてよいようにしました。

お絵かきコーナーでは、大きな紙に自由に絵を描いてもらいました。紙とペン、模造紙は学生側で用意し、野外での活動だったためブルーシートを学校側から借りて模造紙の下に敷きました。

これらのゲームを1つでも遊んだ際、参加賞として厚紙で作ったメダルをプレゼントしました。メダルにはひもがついており、首にかけられるようになっています。遊んだ場所の、種目名と点数をメダルの裏に書き、記録カードとしても用いました。また、レクリエーションが終わった後、動物倒し、輪投げの高得点者には賞状を与えました。

小倉：次に、この活動に決定するまでの経緯を話したいと思います。はじめは3つの班の活動を切り離しており、3つの中から1つ子どもたちを選んでもらい、1つの班の活動を2時間遊んでもらうというものでありました。そのため、私たちの班では子どもたちをいくつかのグループに分かれてもらい、5つの競技をまわるというオリンピック形式にして、グループで点数を競うという計画を進めていまし

た。しかし、先生方の助言もあり、子どもたちが自由にいろいろな活動をまわる、という夜店形式に大きく変更しました。そのため、オリンピック形式ではグループ活動ができず、スムーズに活動をまわれなくなるため、先ほど説明した活動内容に変更しました。

私たちの班では、大きく分けて「活動」、「創作」という2つの目的をもとにこの遊びを作りました。「活動」のもとに、魚つり、動物倒し、輪投げがあります。投げるといふ動作に着目し、コントロールを重視しました。投げると一言にいても、この3つの活動でいろいろな種類をおりませました。また、他の面で、ルールを守って行動することも重視しました。「創作」のもとに、びゅんびゅんごま、お絵かきコーナーがあります。びゅんびゅんごまでは、こまに色を塗ってもらうことで色のコントラストを楽しむ、また切って形を変えることでびゅんびゅんごまの構造を遊びながら考える事を目的としました。お絵かきコーナーでは、普段は大きなスペースに絵を描くということがないので、これを機会に大きな摸造紙に両手を広げるくらいいっぱい大きな絵を描けるようにしました。私たちの中でのモットーは、手作りでした。例えば、メダルはただ紙を貼って終わりではなく、自分たちで色鉛筆や絵の具を使い、心のこもったものになるよう心がけました。これで、活動内容の報告を終わります。

司会：つづいて、反省点や感想などありましたらお願いします。

中村：私たちの班の反省点は、私たちが子どもと一緒にまわることを考えましたが、子どもたちがいっせいに来てしまったため子どもの対応におわれてできませんでした。点数をつけるのも、子ども的人数が多くて一人一人に対応できず点数をつけることができませんでした。人数の設定やはっきりとしたルールを決めたほうがよかったと思いました。

前田：絵を書くときなどに使うペンなどの道具が不足したり、ハサミが散乱していたので、ハサミは机などに固定したほうがよかったです。各種目毎にうまく並んでもらえず、スムーズに始められなかった種目もありました。来てくれた子どもたちそれぞれに参加賞としてメダルを作ったのですが、完全にいきわたらなかったので、ゲートを作ってそこでメダルを渡したらよかったです。

町平：魚つりで竿の磁石がくっつき、からまったので、くっつかない工夫するべきだったと思います。動物倒しで、ダンボールで作った動物が風で倒れてしまったので、風がふくことを考えてつくるべきでした。メダルの絵で男の子向け、女の子向けのバランスが悪く、男の子から不満の声がでました。お絵かきコーナーで小学校から借りたシートの上に紙を置いて描かせていたが、ペンの色がシートに写ってしまい、シートを汚さない工夫が必要でした。屋外でやったのにもかかわらず、あまり屋外の利点を生かしていなかったと思います。

鈴木：感想を言います。活動内容をグループで考え始めたとき、多くのアイデアを出しあい、私自身いい方向に向かっていると感じました。それは、二度にわたっての先生方のアドバイスを聞くまででした。安全性の面もありますし、子どもたちを三時間という長い間ひきつけられるか。子どもたちをどう動き回らせるか。指摘されて、自分たちに計画性が足りなかったことに気づきました。その後、アドバイスを踏まえて活動を考え直し、準備にとりかかりました。実際とても大変な作業でした。集まる日を決めても、夏休みにはみんなが集まるのは難しく、私自身も私用で行けず、グループの人たちに負担をかけてしまい反省しています。9月5日二度目の三大小訪問で、子どもたちと初めて触れ合ったのですが、とても楽しく、また、子どもたちのパワーに驚きました。活動の内容の説明も、工夫を凝らしたのですが、それに対しても子どもたちは楽しんでくれてとてもうれしかったです。子どもたちに、9月25日の活動を楽しみにさせることを目的にしたつもりが、私自身早く9月25日一緒に遊びたいという気持ちになりました。当日

の活動では、朝の準備がうまく進まず、時間におわれたり、計画したことができなくなったりもしたけれど、とてもよい活動」になったと思います。私は、びゅんびゅんゴマの所にほとんどいたのですが、一度

きた子どもたちは、できるまでひたすら練習したり、できた子でもびゅんびゅんゴマでずっと遊んでいたりと、見せにきてくれたりして嬉しかったです。最後には、子どもたちと握手ができ、じかに子どもたちのぬくもりを感じ、触れ合うことができてよかったと思います。

有馬：計画段階ではどういうふうによつたらいいのか全く分からず、計画を何回も考え直し、大変でした。また、小学生の学年による特徴の違いがあまりわからず、現場の先生や現場を知っている先生にアドバイスをいただく機会があったので、それは私たちにとって、とても貴重なものとなりました。また、実際の活動では準備万端とはいえない部分が多くあり、計画・準備段階で考えていなかったことも多くありました。また、学生の手が回らず生徒に不便をかけたのではないかと思う面もありました。しかし、生徒がどんどん来て、遊んで、活動して、楽しんでいた様子を見て、とても嬉しく思いました。生徒のパワーはすごく、元気で活発で、我々が負けていたほどでした。経験というものが大切だと本当に思いました。たった、一回ですべてうまくいくはずがなく、活動の積み重ねにより、その場の対応など、うまくできていくのだと改めて思いました。

高橋：正直、準備の段階では、用意するものが多くて、本当大変だったのですが、当日、子どもたちの楽しんでいる表情とか楽しいよという声を聞くと、本当に大変だったけど、やっ てよかったなというのが身にしみました。またこういう活動があったときには、準備段階の辛さの先にはそういう子どもたちのうれしさとか、楽しさがあるってことをまた思い起こして頑張りたいと思います。以上です。

司会：ありがとうございました。つづいて第2グループさんお願いします。資料参照

安倍：第2グループの活動を報告します。安倍です。私たちのグループは、紙飛行機を飛ばして楽しむことを第一に、作ることの楽しさも児童に味わってもらうことを目標に、「かみヒコーキまつり」を行いました。活動で使用する飛行機は三つの案が出されました。3ページからの図を見てください。まず、図2 1はプロペラ飛行機です。小学校で扱うことができる内容で、紙を折ってその折り目部分から切ると対称なものが作れるということを学ぶことができます。風を受けて回るプロペラに児童は興味を示すのではないかと考えられました。しかし、小学1・2年生には飛行機を振り回す行為が少々難しく、遊ぶ時は隣との間をある程度空けなければならぬため、広い場所が必要でした。次に、図2 2は割り箸飛行機です。かなり距離を飛ぶことができる点が魅力ですが、人にぶつくと危なく、割り箸を切る作業は子どもには無理ということでした。図2 3は、紙飛行機です。活動で使ったのがこのタイプの飛行機で、ある程度の距離を飛ぶことができます。胴体を折る作業と尾翼を作る作業が難しいため、学生が作っておくことにしました。児童の反応については4の活動を終えての部分で話します。当日の活動形態は、9時50分と10時45分に、15分ほどの飛行距離を測定する記録会を行うことにして、それ以外のおき、児童は自由に作製し、遊ぶことができました。

役割分担は、グループのメンバー8名のうち、記録会以外の時は、監督係の学生が1名ずつステージの上と下に待機し、児童が測定場所をうろろしたり、ステージから飛び降りたりしないよう指導します。作製場所では5名が手分けして作製指導し、1名が児童に材料を渡します。記録会では児童監督係が1名ずつステージ上下に待機し、3名の測定係が飛距離を測定し、そのうちの1名がマイクで発表します。記録係2名がそれを記録カードに記入し、児童に渡すようにしました。それぞれの時の児童の流れは図3 1,3 2に示しておきます。活動を終えてわかったことは、紙飛行機の主翼部分は児童に自ら切ってもらうようにしました

が、うまく切れない児童がいました。また、クリップの使い方を知らない児童が多く、主翼を取り付ける際、胴体の重心を見つけるのも難しかったようです。私たちのグループの活動は、児童が「やる」という意思表示をしないと、材料を渡せないうえに、体育館は対面式で使用するため、朝に準備ができず、児童に体育館で何を行うのかという期待を持たせることができなかつたので、始めのうちは小人数でした。

1回目の記録会開始時も人数が少なかつたので、児童監督係、測定係、記録係各1名でやっていました。このあたりから人数が増え始め、測定希望者と作製希望者が同時に増えたので、4名の学生で作製指導を、3名の学生で記録会をおこなっていました。それでは学生の人数が足りず、記録会は同時に児童3名分の飛行距離を測定する予定でしたが、1名~2名ずつでなければできませんでした。増える測定希望者に対し、一度に測定してもらえる児童の数が少なかつたため、結局、記録会はそのま活動終了時まで続けました。1人1回の測定予定でしたが、こちらの説明不足のせいで何回も測定をしにくる児童がいました。記録カードは好評だったようです。安全のためステージの下にはマットを敷いていましたが、ステージから飛び降りる児童が多数いました。飛行距離の見当をつけるため、5mごとにすずらんテープでしるしをつけていましたが、測定場所に自分の飛行機を取りに行った児童が足をひっかけて危険でした。以上第二グループの活動報告を終わります。

司会：ありがとうございます。つづいて感想をお願いします。

早乙女：感想を発表させていただきます。私は、この特別活動実習を通して、子どもたちと実際に触れ合うことによって、様々なことを学び取ることができたと思います。はじめ、活動場所が体育館だったためか、子どもたちの集まりが悪くてとても心配だったのですが、一人また一人と次々と参加してくれて、たくさん子どもたちに紙飛行機を作ってもらえることができるともよかったです。私は主に作製指導をしていたのですが、私たちが想像していた以上に、この紙飛行機作りは低学年の子どもたちには難しいところが何ヶ所かあったようで、子どもたち自身の手で飛行機を完成させてあげたかったのですが、ついできなかったのが横から手を加えることが何回かありました。それだと、自分で作り上げる楽しみが半減してしまうので、そこが残念だったように思います。やっぱり、子どもたちは私たちのかんがえていた通りには行動してくれないのだなと思いました。でも実際の現場ではこのような事は日常茶飯事に起こりうることだと思うので、実際の授業を使わせていただいて、このような体験をさせていただくことができたのは、とてもありがたいことだったと思います。ありがとうございました。

佐藤：感想を言います。私たちのグループはこのふれあい体験活動のために長い時間をかけて準備してきました。普段ではあまりできない遊びを子どもに体験させるということから、作る喜びを体験させようとかんがえていたけれど、何を作るかがなかなか決まりませんでした。小学1・2年生でも作れて面白いと感じ、さらに安全にできるものというのは難しかったです。そして、作るものが決まってからも、進行の仕方、会場の様子などを考えなければならず、一つの事を計画する難しさを知りました。このように学生自身が意見を出し、工夫を凝らし、活動の最初から最後までを計画するというこの活動は、大学生活の中でも滅多に経験できないことです。また、ここには必然的に、協力ということが伴います。よってこれだけでも、価値のある体験だったと思います。さらに、子どもたちと直にふれあえたことは私にとって、とても嬉しく大切な体験となりました。何度も飛ばし続ける子や、自分なりに工夫する子、記録を伸ばそうとする子など様々な子どもがいて、それぞれの子ともふれあいをもてたことに、本当に嬉しさを感じました。子どもたちが夢中になって紙飛行機を作り飛ばしている姿は、活動が成功した事

の証であるように思います。私たちが必死に計画したことで、子どもたちが喜んでくれたことを通して、子どものために一生懸命何かをしてあげると何らかの形で気持ちが帰ってくることを学びました。この喜びを味わえたことが、この活動で何よりもよかったと思います。

会津：感想を言います。活動の中で私は主に作業指導をしていたのですが、作業指導している時の言葉使いを生徒さんに注意されたりして、そういう細かい所も気をつけないといけないと感じました。何度も作りに来てくれた生徒さんたちもいて、とても嬉しかったです。活動はとても思っていたよりもうまくいったと思います。

小山内：私は、はじめ子どもの監督係をやっていたのですが、ステージ上から飛行機を子どもたちが飛ばして、そのステージから直接下りないで階段を使って下りるように指示したんですけど、子どもはなかなか言うことを聞いてくれませんでした。一応ステージの下に安全のためマットはしいていたんですけど、やはりほとんどの子どもがステージから下りてしまって、何度も注意をしました。先生の方から、もしまた下りるようだったら、もっときつく叱っていいという指導もあったんですけど、ちょっと私のかんろくが足りないのか、叱り方が悪いのか、叱っても子どもは大丈夫と言って自分の好きなように、階段を使わずに下りてしまったんです。そこが私としてはどうしていいかわからず、困ってしまいました。あと、後半の方は作製の方を手伝ったんですけど、1・2年生でクリップを使えると当然のように私は思っていたんですけど、子どもたちはクリップを普通私たちが使うようには使わず、逆の方からさしこむような形にしてしまって、あまり、クリップの役割を果たしていないようなかんじでした。使い方を教えてあげても、やはりすぐにはできないようで、始めはその子だけがそのように使っているのかなと思ったんですけど、ほとんどの子どもたちがそのように使っていたので、ちょっとそれにびっくりして、1・2年生がどれくらいの作業ができるのか自分は全く把握できていなかったと思いました。今回はいろいろ大変なことが多かったけど、終わった後は充実感がすごくありまして、疲れもふきとんでしまいました。ありがとうございました。

佐藤：感想を言います。最初はどんどん企画の内容が変わって行ってしまって、どうなるんだろうなっていうのがありました。内容が煮詰まらないうちに当日が来たようなかんじでした。本当はもっといろんなことがやりたくて、いろんなことを考えたんですけど、ここに書いてあることの他にもいろいろかんがえてたことがあって、それがやればよかったんだろうと思います。結果的に子どもたちが喜んでくれたので、それが救いでした。

司会：ありがとうございました。では、続いて第3グループ、中庭での活動報告をお願いします。

稲見：私たちの班は中庭全体を使って、紙飛行機、ストラックアウト、空き缶ロケットボーリングの4つのゾーンを作り、子どもたちが自分自身で作ったもので遊んでたのしんでもらうことを目標としました。自分自身で作る際に、はさみを使わなければならない場合もでてきたので、1・2年生の子どもたちにはさみを好き勝手に使わせるのは危険だと思い、中庭の脇にはさみを使って切るコーナー、ストラックアウトのボールを作るコーナーなど、一箇所に作る場所を集めて、はさみを使う子たちの近くには、大学生を配置することにより、子どもが怪我をしないように心がけました。また、空き缶ロケットは完成度が高く、子どもが始めから終わりまで作るのは難しいと思ったので、大学生は子どもたちが絵を描いたり、飾りつけだけで完成というところまで下準備をしていきました。計画の段階では、ボ-リング、ストラックアウト、紙飛行機などを得点制でやるつもりだったのですが、得点制ではできる子とできない子で差が出てしまい、トラブルになりやすいという注意を受けたので、得点制はやめて、単純に

ゲームを楽しんでもらうことにしました。なんとか子どもたちは諦めることなく、時間ぎりぎりまで楽しんでくれました。しかし、問題点として人手不足の為にローテーションがうまくまわらなかったこと、グラウンド、体育館の人たちとの話し合いの少なさから、子どもたちに他の班が何をやっているのか聞かれても答えられなかったことなどがあげられました。

司会：感想をお願いします。

秋山：感想をいいます。僕は特に紙飛行機とストラックアウトのところにいました。最初、紙飛行機のところにおいて思ったのは、この箱を作って最初自分たちで試した時に、全然、的に当たらず、本当に子どもたちがうまくいくのかなと思ってたんですけど、実際やってみたら、同じ場所に10回連続投げ入れている子どもがいて、子どもたちのほうがすごい上手なんだなと思って感心しました。ストラックアウトは、本当に子どもがいっぱいいて、長い列を作って待っていてくれてすごい嬉しかったです。でも、特にストラックアウトは、台をダンボールで作ってたんですけど、長い時間が経つにつれてだんだん脆くなってきて、補強をしているので、「この場所は今ちょっと休んでから、次のところまわってちょうだい」と言って休憩を入れていたので、もし、次にやるのであれば、改良しなければいけないと思いました。僕は、その活動の後に、小学校の給食に参加したんですが、その場で、お兄ちゃんこっち来てとかすごい皆話し掛けてくれて、すごい仲良くなれたなと思いました。そうやって、子どもたちが笑ってるのを見て、ああ、こういうことをやってよかったんだなと思いました。

工藤：私は、ローテーションがあることを忘れてずっと作業場にいたんですけども、子どもたちは本当に頭が柔らかくて、私たちが絵を描いてもらおうと、絵とペンだけを用意していたら、それだけでなく、はさみで模様を切り抜いたりして貼りつけ、きちんと工夫していました。皆、びっくりするほど器用で、こういうピカチュウのこういうのも作って、プレゼントしてくれました。これは宝物です。次々に新しい遊びを作っている子どもたちに、驚かされたり、暴走してしまう子どもたちをどう叱ったらいいか困ったりしたんですけど、いろいろありましたが、子どもたちには、いろんなことをきづかせてもらいましたし、とてもためになる体験だったと思います。

司会：ありがとうございます。では、今回グループごとに、活動場所が違っていたということもあり、事業3内の学生であっても、他の2グループが実際どのように活動していたか、把握しきれなかったこともあると思いますので、他のグループの活動内容について何か、質問のある方はいますか。

(質問なし)

司会：では、活動報告を受けて、いくつかの反省点、課題も見えてきたようなので、いくらか考えてみたいと思います。まず、準備物についてですが、1班では風で動物倒しの的が倒れ

てしまったことや、メダルの男の子向けと女の子向けのバランスが悪かったなど反省点があったようですが、2班では飛行機づくり、記録カード、3班では作って遊ぶというゲームが多くあり、どの班でも準備する物品があったと思いますが、工夫した点、反省点、考えられる改善方法などなにかありませんか。

司会：……………。

司会：こちらから聞いてみてもいいですか？

耐久性の問題など、いろいろあると思うんですけど、何かないですか？

司会：阿部さんお願いします。

阿部：男向け女向けの話ですけど、第2グループは飛行機を作るということで、女の子には少し抵抗があるのではと思ったんですが、以外と事前に小学校に遊びに行っ
て、紙飛行機を折ったときもそうなんですけど、以外と遊べるってこと自体が楽

しかったようでした。それから、記録カードに星のシールを貼るという事で、シールを探したりしていましたが、シールがピンク色しかなくて、男の子には今度そっちの面で抵抗があるのでは、と思いましたが、自分にもらえることが1, 2年生ぐらいの子にはうれしいようで、そんなにきにしなくてもよいのでは?と思いました。

司会：他に何かある人いませんか？

小笠原：子どもたちがたくさん来ることを考えて、材料、ペンや新聞紙やペットボトルなど、材料は多めに用意したんですが、終わってみるとたくさん余ってしまったものや、足りなかったものなどあって、材料の準備する量はどれくらいを目安に準備すればよいのかわかりませんでした。

(清水先生挙手)

司会：清水先生。

清水：このシンポジウムでカメラ係をずっとやらせてもらってて、ファインダから見た君たちのことで感じたことでもいいですか？

司会：……………はい。

清水：今はなしを聞いていると、物を作る、それで遊ぶっていうことで、そのものをどう作ったらいいだろう、どういう風に改良していけばいいだろうっていう話が中心になっているけれども、もう一つ視野を広げて、このフレンドシップっていう事業が君たちと子どもたちとの関わりで、どういう風な接点があって、子どもたちの気持ちやあなたたちの気持ちがどういう風に結びついた、あるいは違いがあったかを聞かせてほしいと思う。カメラから見た君たちを見ていて、いいことばかりではなかった。非常によかったのだけでも、やっぱりこれは経験をつまなくちゃわからないことかもしれないが、後ろにもう少し気を配っていたらよかったと思う。僕はほかの小学校で「目、後ろにもつけてみたら?」と言ったりしている。後ろで子どもたちが何したいんだろう、どうなったら危ないのかな?そういうような目もてたら、もっと君たち自身もゆとりができたし、君たち自身も楽しめたと思う。本当の意味でのフレンドシップが、意味あるものになるんじゃないかと思いました。

司会：これについて何か意見のある人いませんか？

司会：私は第2グループで活動していた平岡なのですが、いろいろやってみてわかったことがすごく多くて、自分の中であった子どものできる能力とか、そういうことに関して、すごくびっくりしました。自分の班ではクリップの問題があったんですけど、そういうことで子どもに対する能力の把握の仕方とかが、結構大きく動いてびっくりしたことなんですけど、ほかの班でこんな風にした人はいなかったかどうかちょっと聞いてみたいと思うんですけど、どうですか？

一同：……………。

司会：1班の人で何か感じた人はいませんか?……………はじめ君お願いします。

高橋：ずっとびゅんびゅんごまについてたんですけど、最初作ってたときに自分らで用意してるときに、子どもたちの中にこんなびゅんびゅんごまが回せるのかなっていうことを思っていました。実際子どもたちは最初はできませんでした。子どもたちに渡して、「まず練習してみて」と言って、教えてやらせても、できなかったのですが、ちゃんと教えて、向こうも理解したときにうまく回せるようになって、実際8~9割の子どもは回せるようになって、家に持って帰ったようです。

司会：ありがとうございました。ほかに2班でも3班でも……………、どうぞ。

小倉：能力かどうかはちょっとわからないんですけども、あたしは輪投げでどの子どもが何点だったかを全部記録しようと思ってて、名札はあったんですけども、名前と点数を子どもたちにしゃべってもらいました。そのときに1年生の子が母音と子音をしゃべれていなかったことがすごくびっくりしました。

司会：ありがとうございました。ほかに何かありませんか？会津さんお願いします。

会津：飛行機を作っているときに、一回作った子がもう一回来て、私に同じのを作っ
てって言ったんです。でも、活動の目的はその子どもさん達に自分で作ってもら
う目的だったので、「自分で作ってみて」といったら、「同じのを作って」って
頼まれて、そう言うときにちょっと困りました。あと、その子の友達が飛行機に
絵を書いてたんですけど、その友達に同じ絵を自分の飛行機に同じように書いて
という風に言っていたのを見て、そういうのもあるのかなと思いました。

司会：ありがとうございました。佐藤先生お願いします。

佐藤：言葉のことを今話していましたが、そのことは正しい指摘だなと思っています。
確かに痛いところを突かれているというのはあると思います。たぶん1年生だっ
たと思いますけれども、1年生に入門期のそれこそ“あいうえお”から始まって
いる。ちょうどあの時期まだ9月の末頃ですので、たぶんはっきりとまだ言えな
い子もいたかもしれないです。あと、言葉づかいは確かによくないです。子ども
たちはあんまりそういう気はないですけど、どうしても教師という職業柄で聞いて
しまうと「その言葉づかいはどうかな」、「その言い方はどうかな」とか、先
程言っていたクレヨンしんちゃんのような言葉づかいをする人がいます。「オラ、
何とかだー」とか、こっちも真似できるようになってしまいうんですけども、
そういうのは学校の指導ということで、段々直していくのです。

私が言いたいのは、皆さんが色々準備して下さって本当に子どもたちは喜んで
いた、これに尽きるのです。さきほどあった校長の感想に全てが集約されていま
す。そのためにはたぶんものすごい事前の準備であるとか、計画を立てるために
何度か集まったと思うし、また、実際に道具を見ると「よく作ってきたね」と思
います。一番びっくりしたのがペットボトルの数。あれはすごい。どうしたのだ
ろうという感じですよ。話には聞いていましたけど、またすごい数だと。あと、
中庭でやっていたストラックアウトとかああいう風な道具もまた上手に作って
くるんですよ。外に行けば、またびっくりするくらい大きな模造紙が広がってい
るし、なかなか工夫されたゲームもありました。紙飛行機の人たちは最初確かに
寂しかったですね。みんな外とか中庭に行って、紙飛行機の所は本当に5, 6
人しかなくて「うーん」と思っていたけど、後半すごい人数になりましたね。
あれは口コミもあると思います。子どもたちの中での情報のネットワークという
か「あそこおもしろいよ」とか「こういう風なの作れんだよ」ということがすぐ
広まるんです。それでたぶんよその所に行った人たちにも「紙飛行機がね」とか、
「すごく親切に作ってもらえるんだよ」とか、いろんな評判があったから、集
まってきて、最終的にはそこにすごく集まっていたんだと思います。

さっきの反省にもあったことだけでも、子どもたちは何よりも喜んでくれました。
本校

の校長も「来年度もぜひ第三大成小学校でやってくれたらうれしいな」というこ
とを言っていました。それは全て結局皆さんの努力のあらわれだと思います。これ
が、校長が「来年来なくていい」、「フレンドシップなんてもういらない」と
言われると、それはたぶん皆さんに対するそういう評価なわけです。だけど、本
校の校長は「来年度もぜひきてほしい」と、皆さんが来るわけではありませんが、
こういう風な企画をぜひ来年もしてほしいというのは、結局皆さんの努力が子
どもたちに跳ね返って、大げさに言えば学校の経営上非常によかったと、子ども
たちの心を育ててくれたんだという風なことだと思うんです。

確かに先ほどでてきましたけど、準備のいろんな問題とかはこの際些細なこと
なのです。皆さんはお金を取って人に何かしているわけではない。だから子ども
たちとふれあうという風なものがやっぱり趣旨であれば、準備ももちろん大切で
すが、皆さんが子どもたちとどのようにふれあって、どういう風な気持ちを持っ

たか、それが何よりなわけなのです。

あの期間はちょうど教育実習の最中で、教育実習、皆さんの先輩方、4年生の方々がきていました。しかし、教育実習にはきているけど、教員にはならない予定だという人も結構いるんです。それは、もっと自分のやりたいものが見つかったのかもしれないし、あるいは、どこかで子どもとのふれあいが、というか接点があったときに嫌な思い出ができてしまったかもしれない。これはしょうがないです。しかし皆さん、今回、さっきピカチュウのあれをもらったという方いましたね。あれが言ってみれば麻薬のようなもので、子どもにはまってしまう原因なのです。だいたい先生をやると、子どもはまずそんなに思ったほどかわいくない、言うことを聞かないということが続きます。「何でこんな先生なんていう職業を選んでしまうのだろう」と思っている、何かあったときにピカチュウなんてもらってみると、やっていてよかったと思うんですね。それでもうずるずると続けてしまうというか。だから、教育実習をしている間に何かそういうのがポツと1つでもあると、今まで先生をやらなかつた人が「来年もがんばります」と言うんです。要するに来年は採用試験を受けますと。やっぱり先生になりたいという人がでてきます。子どもとふれあって、「いい仕事だな」とか「子どもってかわいいな」とこう思ってしまったら、もう抜けられませんか。皆さんはどうか？結局そこを感じてほしいのです、実は。子どもとふれあって、僕たちも楽しい、私たちも楽しい、子どもも楽しい、で、こういう子どもたちのために自分たちがどういうことをしてあげられるか、してあげたいとか、かわいいものだなと、ずっといたいなというのがやっぱり先生の原点だと思います。それを感じてくだされば、非常にうれしい、助かるということです。私も弘大教育学部を終わりました。自分の学生の時を振り返ってみると、こういう企画がなく附属小学校に3年生の時、いきなり教育実習に行きました。指導案の書き方もこの大学は教えてくれませんでした。で、初めて指導案を書きなさいと言われて、書き方がわからないんです。で、そこの先生が優しくこういう風なものだとある程度教えてくれて、それでやったのです。結局指導案の書き方とか、夜寝ないで指導案を書いて、次の日行って悲惨な授業をしたりっていう経験もありますけど、やっぱり子どもとそうなるのが楽しいんです。そういう苦労が何ともなくなってしまう。すると、やっぱり学校の先生になりたいって気持ちがすごく強くなったわけです。で、4年生も実習に行つてそこも恵まれていて、非常に楽しかったんです。それで、我々の時も採用試験がそう簡単ではなかったんですけども、「学校の先生に絶対になりたい」、「たとえ落ちたとしても来年もう1回受りたい、それでだめでもまだやりたい」と、そういう風に思うようになりました。幸いなことに採用されて、今こうしているわけですが、皆さんもそういう風なところ、子どもたちとふれあってちょっとしたところでびくっと惹かれるものとか、子供っぽいなと感じたところがあるかなと思います。来年3年生の実習の時に、ひょっとしたら学校の先生嫌だという人がでてくるかもしれません。けれど、そういう風なところをちょっとでも感じれたらいいなと、又今回感じてもらえたらよかったなという風に思っています。

弘前市教育委員会のキャッチフレーズですか、「はぐくむ夢、響き合う心」と。さっきこの教育フェスティバル2001というのを見たら「人、夢、はぐくみ」と書いていて、「ああ、なんてすばらしい。弘前大学もやっと弘前市教育委員会の真似をしたか」という風に思いましたけども、ここなんです。「はぐくむ夢、響き合う心」ということで、子どもたちと響きあえる、ふれあうと言うよりもむしろ響きあえるというか、そういう風なところに結びついてもらえればいいなと思います。ぜひ来年も第3大成小学校でフレンドシップ事業を引き受けたいと、先ほど校長が言っていました、私も同じ気持ちです。7月頃、皆さんには、

せっかく作っていたものを、「これはどうかな」とできるだけ優しい口調ではっきりと直させるようなことをいっぱい言ったんですけれども、おかげで意図するものに段々近づいて行って子どもたちのために結果としてよかったのではないかと思います。

小田切：私が大学生の時は、子どもと接したのは大学4年の2週間の教育実習期間だけでした。子どもとふれあうことによって、取捨選択ができるのだと思います。子どもが嫌いならば先生にはならないほうがよいと思います。子どもの立場になってみると、担任が子ども嫌いであれば不幸だと思います。教師としても不幸だし、受け持たれた子どもたちも不幸なのです。

自分のときは、最初から授業を任せられ、師範授業なしで何も無いところから授業をはじめました。最初の授業では緊張のあまり胃が痛くなり、保健室で寝ていました。実習が終わり、最後に子どもたちからもらった色紙には、『教員にむいていない』などと書かれていましたが、何かこの仕事はおもしろいと思い、採用採用試験に合格した後、教育困難校で指導をしましたが、ほとんど聞いてもらえない日々が続きました。30歳のころ、教員は自分には向いていないと思いました。荒れていた時代で、多くの問題を抱えていたのでやめようとおもいましたが、やめて次の仕事を何にするか考えているうちに、教員を続けていました。

皆さんの話を聞いていて、苦労したあとには必ず喜びがあると思いました。しかし、遊ばせるだけでいいのか考えてほしい。遊んで楽しかった、よかった。でも、学校という中でやっていることなのです。何がよかったのか、どんなことが悪かったのか、考えてみてください。この前は27人でひとつのことをやっていましたが、普段学校の先生は一人で受け持たなければなりません。30~40人を一人で教えるのだから、後ろどころか四方八方に目が無いといけません。今からそういう目をもつことは要求しません。

教師は知能労働者ではなく、絶対に肉体労働者です。この前は27人で3時間でしたが、学校の先生は1人で5~6時間を行っているので、本当に体力がないと務まりません。あと2年半、体力と心を養ってください。

千田：当日活動を見て、よくがんばったなと感動しました。1回目の話し合いでは、この先どうなるのかと思って心配していました。

今回の活動について、子どもの気持ちという面からアドバイスしようと思います。

ルールについて

ルールは皆さんが決めたルールで、子どもたちが決めたルールではありませんでした。子どもたちが次から次へとおしよせたり、けんかをしたのは、子どもたちが作ったルールではなく、受身になっていたからだと思います。現在の生活科では、自分たちでルールや決まりを作る、という活動をします。以前は『物を作る』という項目でした。人間関係が希薄になってきたので、遊びを通して学ぶことが重要になっています。

係の仕事がやりたい

皆さんは、子どもたちが係の仕事をやりがっていたことに気づきましたか？お手伝いをしたがって、はまってきた子もいたのではないのでしょうか。子どもは遊ぶことも係の仕事もやってみたかったです。お手伝いをしたがっていた子にはやらせてあげたら満足したのではないのでしょうか。

声かけ

子どもたちに声かけするときには、取った点数だけではなく、ルールを守ったときや譲ったりしたとき、子どもが工夫したところもほめてあげるといいと思います。そのような部分でのほめ方にも注意してみてください。

準備物

魚つりを例にとると、魚の入っている池がとでももろかったので、下にもダンボールをつけるなどの方法もあったと思います。その場ではどうすることもできなかったと思うので、やりたくて仕方がない、楽しくて仕方がないという子どもの気持ちを考えて、並ばせたり、何人ずつか決めたり、ルールを徹底することも大事だと思います。

点数・数字にこだわらせすぎない

子どもたちは、点数や数字にこだわらせるととても喜びますが、こだわらせすぎなくてもいいのではないかと思いました。

今回の活動のテーマに『子どもの気持ちや行動を理解する』とあったので、それに関係するお話を体験談からいくつか紹介したいと思います。

生活科の授業で秋の公園探検をしようという授業がありました。自分がやった楽しかったことや発見したことをみんなに認めてもらおうという授業で、子どもの反応を見てみました。みんなに認めてもらうために子どもたちが教え方を工夫するという場面で、子どもに、「これをこういうふうにしてみたらどう？」と尝试してみたら、その子は「うーん・・・、やらない。」と答えました。「どうして？」と聞いてみると、「それは私たちにはむずかしいから。2年生になったらやる。」と言いました。自分たちの力や自分たちの発達段階では無理だと、子どもたちが判断したのでした。こっちではできるのではないかと考えていても、こっちの見取りと子どもの考えが違っていたのです。

もうひとつ、こちらでたくさん話をしたら子どもがのってきて、「それもいいな、これもいいな。」と言ってきたので、その子は自分のアドバイスを聞いてやるのだなと思っていたら、次の日行ってみるとその子は全く違うことをしていました。「きのうやるって言ってなかった？」と聞いてみると、「きのう先生があまり楽しそうに話していたから、自分もできるかなと思ったけど、よく考えてみたら自分のやりたいことと違った。」ということでした。自分のやり方があったようです。子どもは子どもなりにこだわりを持って活動しているので、こっちの思うとおりにはいきません。子どもにそった支援というのは難しいですが、子どもの判断とぴったりしたときに1人1人に合った支援になるのではないのでしょうか。

体験を通すという点からの話をします。ある子どもが、トンボを捕まえたといっせて見せにきました。みてみると、松ぼっくりと草と松の葉とトンボが袋の中にくちゃぐちゃに入っていました。トンボの羽は折れ曲がっていて、苦しそうに入っていました。その子は捕まえたことがうれしかったようです。

大きなミミズをつかみたいがつかめないで、「誰か捕まえてー、誰かー！」と言っている子がいました。その子は普段から活発な子で、ミミズくらいつかめそうな感じの子でしたが、捕まえることができず、通りかかった普通の子が、何の気なしにミミズを捕まえて活発な子の袋に入れてあげました。活発な子はほかの子がほしがっても、「これは自分のものだ。」といっせて持っていました。マツモ虫を見つけると、また「取って、取ってー。」と言っひほしがりました。マツモ虫を捕まえると、その子はさっき持っていたミミズを地面に捨て、マツモ虫を袋に入れました。生き物を物として見て、触れもしないし棒で突っついているだけでした。子どもたちの中には少し感覚の違う子たちがいて、その子たちは、「ミミズ痛そう、かわいそう。」と言っひほしていました。そういう子たちはどんな子たちなのかと思っひ調べてみると、夏探検のときに虫を育てていた子たちでした。その体験があったので命の大切さを感じていたようです。

先日教え子たちと会う機会があり、教え子たちがやたら福祉関係の仕事についていたことに驚きました。教え子たちに聞いてみると、その当時学校では体の不自由な人たちと交流する機会があっひ、運動会をいっしょに行ったりしました。

最初子どもたちは自分たち中心でプログラムを考えていたので、体の不自由な方にとってはかなり無理のあるプログラムでした。しかし、2年3年と続けるうちに、相手のことも考えたプログラムを作るようになりました。教え子たちはそのときのこときっかけとなり、人との関わりや相手のことを考えるという気持ちが、将来を決めたといっていました。

私が教師になろうと思ったのは、小学校のときの担任がひどい先生だったので、こんな人たちに教育を任せておけるかという気持ちから、教師になることを決意しました。その後も向いているとか、向いていないとか考えることもなしに、絶対に教員になってやるという気持ちで大学でも学びました。

一生懸命やってもすぐに変わることがない、それが教育です。子どもがかわいいな、と思った気持ちを大切に、いろいろな問題が出るかもしれませんが、それに向かって頑張ってください。